98-10

札響くらぶ

第6号

発行／札響くらぶ
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番15号
（札幌コンサートホール内）
電　話 011-520-1771
ＦＡＸ 011-520-1772

98年度総会行われる
～札響くらぶ主催コンサートを～

去る６月９日、98年度「札響くらぶ」総会が86名の会員の参加により開催され、当くらぶの３年目の活動方針が討議されました。

「札響くらぶ」の活動目標は、より多くの方々に当くらぶの会員になっていただき、より力強い札響の応援団活動を展開できるようにすることです。そのための方策として、次のような98年度の具体的な活動方針が了承されました。

その一つ目は、会報発行の継続です。この会報は、「札響くらぶ」の活動状況を発信する情報誌として継続的に発行する努力をして参ります。

二つ目は、新しく常任指揮者に就任された「尾高忠明さんを囲む会員の集い」を開催します。11月９日の夜に予定しておりますので、後日出欠のご案内を差し上げます。

三つ目は、「札響くらぶ」主催の札響演奏会を開催しようという企画です。演奏会開催経費を最低限に絞り込む工夫をしながら、会員の皆さんにチケットを数枚ずつ販売する協力をしていただくことによって、音楽に関するクラブ活動などに参加している高校生などを数百人札響演奏会に招待したい。音楽に関心のある高校生らにコンサートホールで札響の演奏を聴いてもらうことで、これらの方々に将来札響を支えるリスナーになってもらいたい、「札響くらぶ」の仲間づくりコンサート、そんな思いによる企画です。

現在事務局では、来年４月17日（土曜日）の夜の開催を目指して企画を詰めているところです。演奏曲目も、会員の皆さんのリクエストをいただき、「札響くらぶ」ならではのコンサートにしていきたい、と思っています。

実り多い98年度総会は、盛会裏に終了しました。

今年度の活動開始は、諸般の事情から少々遅くなりましたが、「札響くらぶ」は今年も元気です。どうかより多くの方々に当くらぶに入会していただきたいものと切望しています。札響を楽しみながら、札響を支える仲間づくり活動をしてみませんか。

ソリストにきく

同級生のタクト、札響との共演がうれしい!!

藤川 真弓 さん

ふじかわ まゆみ

旭川出身
世界に誇るバイオリニスト

1998年9月9日、第405回定期演奏会の前日、リハーサルを終えたあと、双子山の麓のレストランで、藤川真弓さんにお話をうかがうことができました。藤川さんとは、私は以前にも何度かお会いしておりますが、飾らない、謙虚な、そして清楚なお人柄のアーティストです。演奏会の直前にもかかわらず、3時間以上楽しいひとときを過ごすことができました。

藤川真弓さんのプロフィール

旭川に生まれ、3歳から父の手ほどきを受ける。
桐朋学園高等部・音楽科で学び、故斎藤秀雄氏らに師事。
67年ベルギーのフラマン国立音学院に留学。レオニード・コーガンにも師事。
70年ベルギーのビュータン・コンクールで優勝、同年のチャイコフスキー国際コンクールで2位。
74年ロンドン交響楽団との英国デビューで大成功を収め、アンドレ・プレビン指揮で再度ロンドン公演、またロリン・マゼールに招かれニューヨーク及びクリーブランド交響楽団と共演。
70年よりほぼ毎年のように帰国し、札響やN響のほか主要オーケストラと共演するほか、夫のチェリスト、リチャード・マークソン氏らと室内楽の演奏活動を行う。
多数のレコーディングの中にはロンドン・デッカのモーツアルトの協奏曲全集（ワルター・ウエラー指揮、ロイヤル・フィルハーモニー）も含まれる。

——　リハーサルのすぐあと、お疲れのところお越し頂きまして有り難うございます。札響とは、何度も共演されていると思いますが、今回は新しいコンサートホールでの共演、大ホールの印象はいかがですか。

藤川　前回の札響との共演は4、5年前、たしか厚生年金会館ホールだったと思います。お客様が入った状態でないとどのような音になるかわかりませんが、コンサートホールの響きは確かに素晴らしいようです。そのうえ、今回は札響の定期演奏会で、桐朋学園時代の同級生の尾高忠明さんとご一緒できることがとてもうれしいです。リハーサルも、和気あいあいで呼吸が良く合ってとてもスムーズでした。

しかし、どこのホールでも共通のことですが、演奏者は自分の音が、聴衆の方々にどんな風に伝わっているか分からないことがあります。お聞きになる側の感じ方は、終わってみないと分からない、ということのようですね。その点でも、私は新しいホールでの明日の演奏を楽しみにしております。

バイオリンとの出会い、3歳のときから父に

——　藤川さんは旭川のご出身で、中学を卒業されるまで旭川で生活されたそうですね。バイオリンはどのようにして学ばれたのですか。

藤川　3歳のときから父に教わりました。父は小学校の教師をしていて、子供たちにバイオリンを教えたり、仲間の先生方とアンサンブルを楽しんでおりました。とにかく徹底した人間で、ひとつのことをやりぬく性格でした。私は学校から帰ると毎日、厳しいレッスンを受けておりました。勤めからもどる父の姿を窓越しに見て、あわてて譜

面台を取り出し、練習しているふりをしたこともしばしばでした。

父からはバイオリニストになることをそんなに強く勧められた訳ではありません。でも、桐朋学園へ入学することになりました。東京でひとりで生活するようになり、本当は父から離れてほっとした、という感じでした。

―― 藤川さんにとって、お父さんが最大のバイオリンの先生であり、また恩人ですね。今の姿を、お父さんが一番喜んでおられることでしょう。

藤川　そうかも知れませんね。

桐朋学園時代、良き師、良き友との巡り合い

―― 桐朋学園時代の思い出をお聞かせください。

藤川　日本がまだ太平洋戦争の復興期で、生活も苦しい時でした。私の同級生にはたくさんの良い仲間がいてとても楽しい時代でした。尾高忠明さんや井上道義さんも同級生で、私たちは一緒に、斎藤秀雄先生の教えを受けました。

思い出に残る演奏といえば……

―― これまで数多くの演奏をされてきて、最も印象に残っている演奏のことをお聞かせください。

藤川　いくつかの演奏のことが思い出されますが、ひとつだけあげるとするならば、1980年頃、英国でのロンドンフィルハーモニーとのベートーベンのコンチェルトです。偉大な指揮者クルト・ザンデルリングと共演した時で、その時受けたインスピレーションは未だに忘れられません。

落ち着いた雰囲気のロンドンでの生活

―― 英国ロンドンでのご生活や演奏のことなどをお聞かせ下さい。ご主人もチェリストと伺っておりますが。

藤川　ロンドンに、もう24年近く住んでおります。落ち着いた雰囲気がとても好きです。主婦の生活と演奏活動、そして教えることもやっております。主人と、メキシコ人のピアニストの方とトリオを組み、日本でも演奏し、札幌でも何度かやりました。近いうちにまた室内楽の演奏活動も再開したいものと考えております。

これからの活動、故郷北海道への思い

―― これからの演奏活動、とりわけ、ふるさと北海道での予定などをお聞かせ下さい。

藤川　日本へは毎年帰ってきております。演奏活動のほか、８月に行われる留寿都での教育プログラムにも、５年ほど続けて来ております。

北海道は私の故郷ですから、もちろん時々は帰って来たいと思います。でも、演奏のこととは別のことと考えております。どこでやる演奏も同じもの、あまり北海道にはこだわりません。演奏家はだれでも同じように考えるのではないでしょうか。しかし、待っていてくれる親しい友人や家族がいるということは、演奏者にとって心が緊張と同時に、いやされもします。

北海道は音楽芸術にとって恰好の大地でしょう。空気がきれいで美しい。でも、音楽は世界共通の文化ですから、北海道がそのための国際的拠点になって欲しいと願っております。

―― お疲れのところ長い時間、本当に有り難うございました。明日の演奏を楽しみにしております。

次の日、10日の定演で、藤川さんは、モーツアルトのバイオリン協奏曲第５番イ短調「トルコ風」を演奏しました。ブルーの爽やかなドレスにつつまれた清楚な姿でした。インタビューの時はシャイな感じでしたが、舞台では堂々として別人のように感じられました。緩急や強弱変化が見事で、情緒豊かなすばらしい演奏に、聴衆も酔いしれておりました。

（インタビュア　山科俊郎）

札響物語　VII

札響と黒澤監督

去る９月６日に映画監督の黒澤明氏が亡くなられました。1985年に封切られた映画「乱」は黒澤明監督が心血を注いで作られた作品であり、その音楽は故武満徹氏が作曲し、札幌交響楽団が演奏しました。各方面からお問い合わせがありましたので、本号ではその時の模様の一部をお伝えします。

「乱」の総制作費は約80億円程とか聞いています。日本では資金が集まり切らなくて、フランスやイギリスなどからも資金提供を受けた国際的な映画作品でした。

一般的に映画の音楽は、作曲家が予め映画監督からストーリーと監督手書きの絵コンテを受け取ってイメージ作りや音作りの準備をするそうで、「乱」の場合も、予め絵コンテなどを受け取ってイメージ作りをしたそうですが、本格的に作曲に取り掛かったのは、前年の10月に出来たラッシュ（未編集の試写用映画フィルム）を見てからの５か月間だったそうです。武満さんが千歳へ音入れに来られた時にはくたくたにくたびれていらっしゃいました。

作曲が進むと同時に演奏者が問題になり、指揮者とオーケストラについて連日議論されたそうです。

指揮者は岩城宏之氏に決まり、オーケストラはロンドン交響楽団と当時岩城宏之氏が音楽監督を務めていた札幌交響楽団が候補に挙がったのだそうです。

黒澤監督からは国際的な映画なのでオーケストラはロンドン交響楽団にしたい、と強いご希望があり、北海道の札幌交響楽団が候補に挙がったことが既にご不満だったようです。

オーケストラは武満さんの強いご希望で札幌交響楽団に決まりました。岩城・札響は武満さんの音楽を数多く初演していて、お互いに信頼関係がありました。

札響の出演については、84年の11月頃打診が有りました。電話を受けた私が、ついつい「ご冗談を」と言ってしまった程、突然降って湧いたビッグな話だったのです。「実はマジなのです」と言われて、大車輪で実現出来るよう準備を始めました。

スケジュールは85年の４月５日から７日まで札幌交響楽団では前後１日ずつ予備日まで用意しました。

録音に使うホールはオープンして間の無い千歳市民文化センターに無理をお願いして用意して頂きました。当時の北海道では最も音響の良い、しかも、外部からの雑音に対する遮音度のレベルが高いホールで、頭の上を飛ぶジェット戦闘機の音も遮れるように出来ていたのです。今日でも遮音の良さは恐らく日本一のホールでしょう。こうして万全の準備をして、録音の初日を迎えました。

録音の技術者は東京の「葵スタジオ」から24チャンネルのテープレコーダー、高速ビデオに落とし込んだ映像を100分の１秒単位で同調録音するための複雑な機材をトラックに積み込んで来て、前日から会場のセッティングをしました。

４月５日午前９時25分、黒澤明監督は黒澤一家と呼ばれる大勢のスタッフを従えて現れました。楽団に挨拶する気はさらさら無く、ぷい、と調整室に入りかけました。さすがに、とりまきの人が気を遣って「かんとく、一言」と促され、黒澤さんは途中から引き返して指揮台に上り「８年かけて作った映画です。よろしく…」と一言、ろくに楽団員の顔も見ないで再び調整室に入り、どっかと椅子にかけてたばこを咥えました。ちょっと迫力のあるシーンでした。

舞台にいる札響の楽団員、岩城さん、黒澤監督の後から調整室に入った武満さん、みんな暫くしゅんとなりました。

私は立場上、黒澤監督への挨拶のため、武満さんの後にくっついて調整室に入りました。挨拶をしてホールへ引き返そうとしたら「竹津さん、ここにいてよ」と、か細い声で武満さんに呼び止められました。

楽屋２つをぶち抜いた調整室には高速ビデオを映す装置と隣にでんと大きな24チャンネルのテープレコーダー、両脇に大きなスピーカー、手前に有る大きな調整卓には「葵スタジオ」から来たミキサーが座り、少し後ろの左に黒澤監督、右に武満さんの椅子が置いてありました。そして、何故か、助手の人がこの２人の間に私のための椅子を置いてくれたのです。仕方なく、

気まずい２人の間に割って入る格好になりました。

黒澤監督の天皇振りは見事なものでした。私たち４人以外には影も形も見えない、気配も感じられないのに、チェーンスモーカーの黒澤監督がたばこを咥える度に何処からともなく火が飛んできて、灰が落ちそうになると灰皿が出て来る、と言う具合でした。監督はその間振り向きもしないで、ブラウン管をにらみながらスピーカーから流れて来る音楽に耳を傾けていました。

黒澤監督は自作の映画には、音楽にもご自分の強いイメージをお持ちで、武満さんには次々と注文をつけられました。武満さんは自分の音楽と監督の要求の狭間でストレスが溜まり益々消耗しました。一方、黒澤監督は段々と顔に血が上り気力が充実して来るようでした。

初日の午前中をかけて、やっと一つの場面の音入れが終了しました。この音楽の寸法はわずかに４分50秒程度です。この音楽を実に40回程演奏しました。ビデオテープとの同調で監督の意図する音楽の頂点が30分の１秒程合わないための録り直しでした。岩城さんは同じ曲をメトロノームも無しにこれだけ多くの回数指揮しても前後に１秒以内しか違わない、と言う天才的なテンポ感覚の持ち主で、ミキサーがまずそれに驚いて、更に、それだけの回数同じ曲を演奏しても集中力を失わない札響の演奏に監督は引き込まれるようにスピーカーの方に身を乗りだして来ました。

武満さんは前年10月からの根を詰めた仕事でくたくたの上に、録音中に次々に出される要求で初日の午前中に既に精も根も使い果たし「今晩は何か精のつくものを食べさせて」と小声で私に助けを求められ「スッポンでも食べに行きますか」と小声でお答えしたものです。

プレイバックのためにちょっと途切れた時、監督は「ちょっと」と声を出されました。スタッフが何事かとすっ飛んで来ました。監督の口から出た言葉は「今晩はスッポン料理」でした。

午前中の音入れは終わりました。モニター・スピーカーで、調整室からミキサーが「ＯＫです。ご苦労さまでした。昼食にしてください」と、ステージからは助手が「オーケストラ解散します」とその時、黒澤監督は大きな声で「ちょっと解散を待って」といきなり調整室から駆け出してステージへ向かい、指揮台に駆け上がり、深々と頭を下げて「みなさんありがとう、千歳まで来て良かったです」としばらく顔を上げられませんでした。

初日が終わって、岩城さん武満さんと黒澤一家のスタッフ全員で、千歳市内のスッポン料理店の２階に上がり、全員がバンチュウで乾杯しました。

ご冥福をお祈りします。

（竹津宜男）

オーケストラなんでもＱ＆Ａ

Ｑ．札響の団員の男女比、平均年齢などについて教えて下さい。

Ａ．札響の団員は、現在80名いますが、男女の比率は、女性15名、男性65名となっています。平均年齢は44.1歳です。ちなみに、団員の中でもっとも若い人は24歳です。

Ｑ．札響の、昨年１年間の活動の概要を教えて下さい。

Ａ．年間の演奏回数は例年とほぼ同じで、120回前後でした。そのうちには、定期演奏会、名曲シリーズなどの札響の自主公演が18回あります。また、学校単位などで行われております青少年のための「札響音楽教室」は20数回開催されています。

演奏地で言うと、道内各地で演奏しましたが、札幌から一番遠くでは稚内市での公演でした。道外の公演は、昨年は比較的少なく、東京公演だけでした。

Ｑ．札響がもっている楽譜は、何曲分くらいあるのですか。また、交響曲１曲で、楽譜は何ページくらいあるのですか。

Ａ．「札響くらぶ」第４号の「PLAYER'S TALK」でライブラリアンも述べていますが、曲によっては国内外のレンタルという場合もありますが、札響が現在保有している楽譜は約1000曲です。オーケストラの場合、スコア（総譜）とパート譜が必要ですから、かなり膨大な量になります。

ページ数は、曲やパートによって異なりますので、一概には言えませんが、なるべく分かりやすい例で言いますと、みなさんご存知のベートーベンの「第９」の第一バイオリンのパート譜で20ページです。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　首席フルート奏者
森（もり）　圭吾（けいご）さん

北国は嫌いだった？

岡山県総社市の出身です。東京の国立音楽大学を出てからドイツ、シュツットガルト音大で４年間学びました。札響を勧めてくれる人がいたんですが、北海道に初めは来たいと思わなかった。エキストラで来てみたら、コンサートリーダーの戸沢さんが退団された直後でしたが、ホルンに窪田さん、トランペットに杉木さんなどがいて、アンサンブルがとても良かった。すごいオーケストラだと思いました。オーディションで合格者が決まらなかった、と噂を聞いたので、次のオーディションの時、ドイツから受けに来たわけです。

札響で12年がたち…

入団してみて、やはり期待通りのオーケストラであることが分かりました。音楽に取り組む姿勢が立派だった。先輩のアドバイスがよかった。初めてプロのオーケストラのプレイヤーになって、それまでドイツで学んできたことは全部一度捨てました。もちろん札響でのこれまでの12年間、ドイツで学んだことはプラスであったし、これからも生かされてゆくとは思っています。いつでもやめる覚悟で、勉強することを心がけています。

以前はオーケストラプレイヤーとソリストは違うと思ったけれど、ソロも合わせも同じだ、と今は考えが変わりました。

最近、11年間使った楽器、ソリスティックな14金ゴールドからプラチナ製に替えました。お聴きになっていかがでしょうか。お客様からの感想を伺いたいのですが。

札響はこれからが正念場

「札響にはプライドがある」と信じたい。そしていつも初心に立ち返ることが必要と思う。

オーケストラが成長してゆくには、それをコントロールし、適切なアドバイスをしてくれる指揮者が必要です。幸い５月から尾高さんが常任指揮者になりました。より緻密なアンサンブルとダイナミズム両方を合わせ持つオーケストラに練り上げてほしいと、心から期待しています。

札響ファンの皆さんへ

最近のクラシックファンは、よく勉強していますね。しかし、ＣＤなどのイメージが強すぎると、生の演奏を心から楽しめないのでは、と心配です。音響の良い「キタラ」効果を十分に楽しんで下さい。

批評について

最近の新聞などで合点のいかない批評をみると、残念でなりません。公的な場でプロを批評するのはそのプロ以上の耳を持った人でなければ…音楽ファンの皆様にもこのことをご理解いただきたいと思います。

札幌交響楽団　バイオリン奏者
山下（やました）　暁子（あきこ）さん

留学から帰りました

昨年８月から１年間サンクト・ペテルブルク音楽院へ留学しておりました。帰国したばかりで、久しぶりのオーケストラ演奏です。

ペテルブルク音楽院を選んだのは、もともとロシア音楽が大好きで、私の好きなチャイコフスキー、プロコフィエフ、ショスタコヴィッチなどがこの音楽院を出ているからなのです。彼らがいたそのままの状態で残っていて博物館のような学校です。作曲家達の生活した場所で私も生活してみたいというのが希望でした。ロシア人の国民性に触れ、ロシアを身近に感じたことをとても嬉しく思います。

札響もロシアものを演奏することが多いので、こ

れからが楽しみです。

生粋の道産子です

私は札幌生まれ札幌育ちで、父が札響のヴァイオリン奏者ですので、幼い頃から札響の演奏を聴いて育ちました。高校、大学と東京で学び、いろいろなオーケストラ演奏を聴いたのですが、やっぱり札響の雰囲気が好きで、卒業と同時に入団して今年で8年目になります。

遊ぶ時間のない留学生活

ペテルブルク音楽院では、学生オーケストラに参加しましたが、楽譜が少なく練習が満足にできないので前半でやめました。驚いたことに街で一番大きな楽譜店でもソロの楽譜も殆どなく、CDやレコードも手に入らず日本から送ってもらいました。

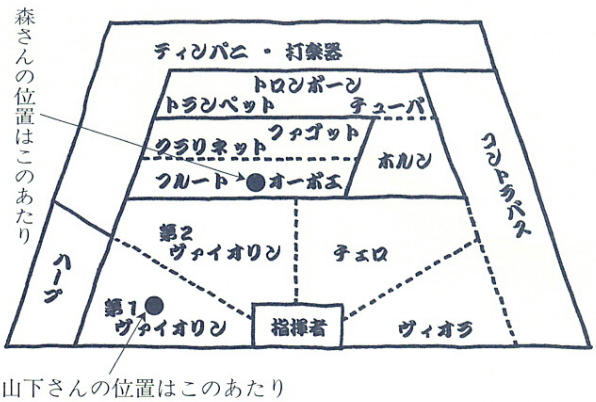
師事した先生は70歳すぎた方で、アウアー（ジンバリストやハイフェッツなど優れたバイオリニストを多く育てた先生）がいつも弟子達に語っていたことやハイフェッツが行なっていた練習法などをレッスンの合間に話して下さり、興味深いものがありました。

プライベートのレッスンは週3回あり、土日は必死に練習で、遊びに出かける時間はありませんでした。ロシアでは小さい時から仕込まれるという感じで、天才的な奏者が出るのも頷ける気がしました。

ロシアの今を感じた一年

師事した先生は自国の文化と伝統に誇りを持ち、育てることに情熱をそそいでとても熱心でしたが、演奏レベルの高いことで有名なオーケストラの方は経済状態の悪化で給料ももらえないというせいか、覇気のない演奏で、心が痛んだ場面もありました。

ホームステイをしまして、一見無表情なロシア人も、心の温かい人々であることを実感した一年でした。



札響の配置

from 「札響くらぶ」

ボランティアで「札響くらぶ」を支えてくださるスタッフの方々が、現在30人となり、演奏会場での受付、会報などの発送や折り込み、そしてこの第6号からは編集の作業にも大きくご協力をいただいて活発なくらぶとなって参りました。来年4月には初のくらぶ主催による「札響コンサート」が実現します。

くらぶ会員の皆様のご希望をぜひお寄せ下さい。「札響くらぶ」だからできる、一味違うコンサートにしてみませんか。

11月定期演奏会を指揮なさる、常任指揮者尾高さんを囲む交流会は11月9日夜開催です。

“もう一度聴いてみたいと土地の人々から思われるオケに！”と、熱意を持って演奏に取り組んでおられます。素顔の尾高さんにお話を聞くチャンスをお見逃しなく。詳細は皆様に後日、はがきでご案内いたします。

「札響くらぶ」の会員になりたい、ボランティアのスタッフで協力したい、くらぶ主催のコンサートにはぜひこの曲を、などなどのご連絡は下記へどうぞ。

「札響くらぶ」
札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1－15
（札幌コンサートホール内）
電話　011－520－1771
FAX　011－520－1772

FAN NETWORK

定期の席を移動できれば

あるオーケストラの演奏会を「生」で聴く機会があり、その迫力に驚き、そしてその時の感動をもう一度味わいたくて、札響の定期会員になりました。今では大ファンですが、その時は札幌に住んでいながら、まだ札響のことは何も知りませんでした。

まだ会場が厚生年金会館の頃で、私の隣の席は外人のご夫婦でした。初めての定期演奏会の日、席に着くとそのご夫婦が「今晩は」と声をかけてくれたのです。生のオーケストラの迫力と感動をもう一度と、ただそれだけで会員になった私は、期待と不安でちょっと緊張していたので、その一言がとても嬉しかったことを覚えています。毎月、このご夫婦に会うことが、演奏会とともに楽しみになりました。まわりは、ほとんど会員の方々で、このご夫婦を中心に和気藹々とした雰囲気でした。最後まで親しくお話をすることはなかったのが残念です。

定期会場が「キタラ」に移ってから思うことなのですが、たまに違う席で聴くことが出来たらいいのになあーということです。一度、空いている席で聴いたことがあったのですが、やっぱり落ち着かないですね。いつ、ここの席の人が来るかと思って。定期会員の席の移動が可能になったらいいですね。

それから、演奏会が終了して解散する前に、オーケストラの方々から、ステージ後方にも挨拶をして頂けたらすごく嬉しいだろうなと思ったりもしています。実現するためにはいろいろと問題はあるでしょうけれど。

とにかく、地元のオーケストラである『札響』をこれからもどんどん応援していく気持ちはいっぱい持っています。

手始めに今度の定期演奏会から隣の人に声をかけてみようかな、「今晩は」って。　（西野留理子）

音楽・思い出の旅路

平成９年の７月は、札響ファンの私にとって思い出深い月度であった。勿論私だけでなく、クラシックの音楽ファン待望の新ホール誕生である。

６月の総合リハーサル、７月のオープニングコンサート、こけら落としコンサートを、連続して聴く恩恵に浴した。なかでも、「こけら落とし」での秋山和慶さん指揮の第一曲目リヒャルト・シュトラウスの祝典前奏曲、パイプオルガンを含む大編成の管弦楽の演奏は、壮大華麗であり、その演奏の光景とその豊かな響きは、いつまでも私の脳裏に残ることでしょう。

音楽ファンには誰にも、長く記憶と余韻の残る演奏会というものがある。

私にとってその演奏会の一つは、17歳で初めてオーケストラ演奏を聴いた演奏会である。それは当時の呼称は日響で、現在のＮＨＫ交響楽団の演奏会である。指揮は故尾高尚忠氏であった。その時の第一曲目は、ワグナーのタンホイザー序曲であった。演奏の始まる前から、心臓の鼓動が鳴りっ放しだったのを、今でも記憶している。地方都市に住み、オーケストラの演奏を聴く機会が少ない当時としては、その感激は一入のものがある。現在のクラシックファンは、その点ではまさに天国であり、更に、われら札幌市民には誇りとする、北海道唯一のプロのオーケストラ札響があるではないか……。

札響くらぶには、昨年３月に札響スペシャルコンサートが厚生年金会館であり、その節入会した。現在は、札響くらぶのスタッフ（最初の呼称はボランティア）として、今後実力相応の活動で「くらぶ活動」の充実に寄与したいものである。

（札幌市厚別区　布広泰一）

編集後記

創刊以来編集を担当されていた、和田さん、藤田さんがお仕事の都合で編集を離れられ、本号より編集を担当させていただくことになりました。

突然のことで、戸惑いもありましたが、前任者のお二人がしっかりと基礎を固めて下さっていましたので、それに乗っかって何とか発行にこぎ着けました。今後、よりよい会報作りに努めてまいりますので、よろしくご協力をお願いいたします。　（佐藤良次）

次号の「札響くらぶ」は来年１月発行の予定です。